２ タクシー

タクシーにまつわる話は、あげていくときりがない。

まずは、いちばん危険だった話から。ロサンジェルスに向かう機内で、アメリカに留学中の女子学生と話をして、ロサンジェルスの空港には、雲助タクシーがいるから気を付けなければいけないと教えてもらった。私もどちらかというと慎重なほうだから、ふつうなら十分警戒する。しかし、その日は飛行機が遅れ、到着が深夜になってしまい、他の公共交通機関は期待することができなかった。

現地に詳しいはずの彼女は、迎えが来るはずなのに、ひとりのタクシーの運転手と長く話し込んでいた。そして、運転手は彼女と入れ替わりで私に話しかけてきた。自分一人だったら、まず引っかからないはずなのだが、つい車に乗せられてしまったのである。

車は、いわゆるイエローキャブとは少し違う。服装は、いかにもタクシーの運転手の制服のようだ。まず、値段の確認から始めるのは鉄則だが、彼は料金表を持っているから安心しろと、印刷物を示す。しかし、もうこの段階から、しまったとは思い始めていた。もちろん彼の手は、私のスーツケースを持っていた。

ホテルは、空港からそれほど遠くなかった。屈強の運転手の後ろで、疲れた頭で対策を考える。車はホテルから少し離れたところで停まり、値段の話になる。日本だと、深夜でも千円までだろう。見せられた料金表は、少し安すぎるようだが、ともかくは平静を装って料金を支払おうとした。だが、運転手は、１００倍の値段を請求してきた。たとえば、１ドル９２セントの場合、ワン・ナインティ・トゥーということがあるが、１９２ドルでも読み方が同じになる。そこを利用してきたわけだ。ドアは中から開かないので、対処のしようがない。推し問答の末、結局、手持ちの現金５０ドルで手を打つことにした。アメリカよりももっと気をつけなければならない南米旅行の前夜の、少し高い授業料であった。

次の話はイギリス。マンチェスターに着き、空港からシェフィールドまでタクシーで行くことにした。イギリスのタクシーは、例の黒のオースティンが多

い。決して乗り心地はよくないが、頑丈な感じだ。値段は５２ポンドだという。かなり距離があるからそれはしかたがない。運転手はやはり体格がよく、少し毛深い典型的なイギリスの男性。あんまり愛想がよいという感じではないが、ごく普通の雰囲気だ。

さて、全体の３分の１ほど行ったところで、彼は車を路側に停めて地図を確認するという。そして、次に、この近くに自分の家があるから、そこから自分の車に乗り換えてくれないかという。この車では坂が登りにくく、スピードが出ないからだという説明は、一応ついた。イギリスの正規のタクシー運転手にそれほど悪い人はいないから、小使い稼ぎかな、と思って、「あなたがそれがいいのなら」といって了承。彼が自分で言っておきながら、「本当にいいのか？」と確認するあたりがイギリス人らしい。

彼の住まいは少し遠回りが必要な小さな村で、家の前の花壇はきれいに手入れがされていた。家の中からは奥さんの声がする。乗り換える車は日産車。彼の体には少し狭いような感じがする。出発してまもなく、前方に火事があり、迂回。ガソリンがないからと半分だけ補給に戻ったり、何かと時間を食う。しかし、そこからのドライブは、シェフィールドの西の国立公園であるピーク・ディストリクトの中を走る「スネーク・パス」を通り、美しい風景を堪能。値段はもちろん 52 ポンドのまま。サッカーのマンチェスター・ユナイテッドに熱狂する、いかにも庶民の運転手であった。

1996　新納泉　　著作権フリー